第15回

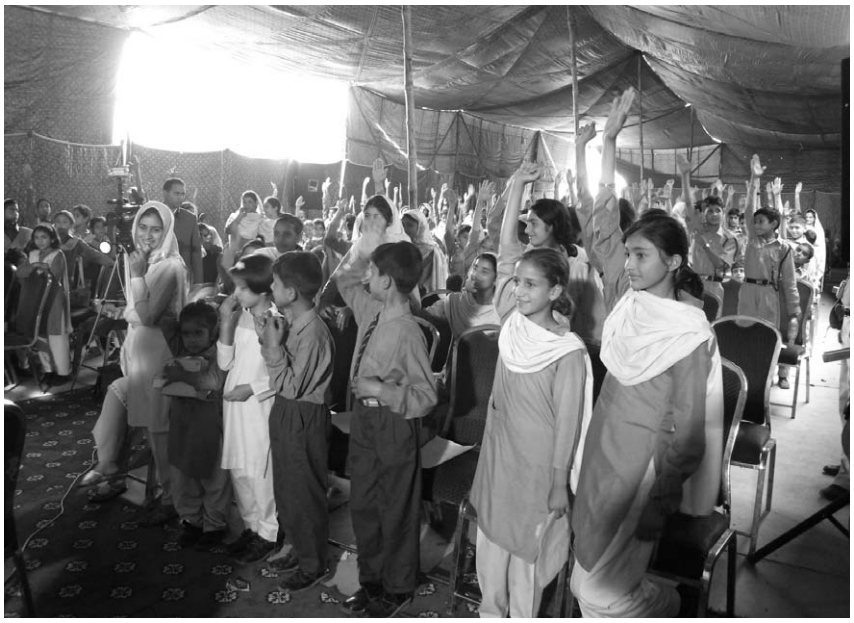
Pakistan パキスタン

JICAパキスタン事務所長 | 貝原 孝雄
Kaibara Takao

実践！★★★★★
人間の安全保障

住民一人一人に防災の力を

2005年10月8日に発生し甚大な被害をもたらしたパキスタン北部大地震から2年。緊急支援から復旧・復興支援へ継ぎ目のない協力を行うJICAは、住民一人一人の防災力強化を重視した支援を実施している。



今年10月25日、JICAが再建した女子校で、NPO法人国境なき技師団とJICA共催による防災セミナーが行われ、子どもたちは地震発生時の対処法などに関するクイズに答え、楽しみながら防災について学んだ

約7万3000人が亡くなり、300万人以上が家を失ったパキスタン北部大地震から2年が経過しました。被災地では、倒壊した住宅約65万戸のうちおよそ21万戸の再建が完了し、35万戸以上を建設している段階ですが、いまだ約6000人がテント生活を送り、地震の恐怖から抜け出せずにいます。住民からは、地震に強い学校や病院を建ててほしいとの声が多く上がっています。

そうした人々の声に応えようと、JICAパキスタン事務所では、現地政府や国際機関、各国ドナーと連携し、震災直後の緊急援助から復旧・復興に向けた継続的な支援を展開しています。例えば、国際緊急援助隊（JDR）の救助・医療チームの活動場所となった北西辺境州バタグラム県で、保健医療施設と小学校の再建に関するニーズ調査を迅速に実施しました。調査の結果は日本政府の無償資金協力事業に活用し、現在約20の医療施設と約100の小学校を建設中です。

また、震源に最も近かったムザファラバード市では、災害に強い町づくりを目指して復旧・復興計画調査を行い、ハザードマップを作成し、それをもとに土地利用計画を策定しました。現在、災害発生時の避難経路や物資供給ルートとなる西岸バイパス道路の詳細設計調査のほか、ムザファラバードからインドに通じるジェーラム渓谷道路の地滑り危険地帯にある5つの橋梁の再建に取り掛かっています。さらに、人々が将来自分たちで被害を軽減できるよう、低コストの耐震技術の紹介や基礎保健医療施設に関する耐震設計・施工技術の普及指導も行いました。

今回、多くの人が初めて地震を経験し、右往左往しているうちに亡くなったと聞きます。そのため、次にいつ起こるか分からない災害で被害を最小限に抑えるには、住民自身の防災意識を高めることが重要と認識しました。

そこでJICAは、ムザファラバードの市民に対する避難訓練や防災教育のほか、地滑り監視・警戒・避難体制構築の支援に取り組んでいます。具体的には、JICAが被災後に再建した女子校で、小学生から中学生まで約300人の生徒と教員に対して、自然災害の種類や災害発生のメカニズム、地震が起きたらまず何をすべきかなどを、各学年のレベルに合わせて伝えました。また、漫画やイラストを多用した目で見て分かりやすい教材も地元の言語であるウルドゥー語で作成しましたが、非常に好評だったので、全国の学校へ配布しようという話も出ています。そうした防災教育の内容は、生徒からその親や親類にも伝わっているようで、人々の防災意識が高まっているのを感じます。

ウルドゥー語が堪能で現地の習慣も熟知している青年海外協力隊経験者も活躍しました。国内唯一の国立障害者総合病院では、医療分野の元隊員が被災者支援のために再派遣され、患者とその家族の自立生活を目指すワークショップを実施しました。また、被災者保護施設で孤児の心のケアを行った隊員もいます。このように社会的に弱い立場にいる人々へ確実に届く援助を実践しました。

人々を中心に据え、住民一人一人の能力を強化するこうした支援は、JICAに対する住民の理解を深めることにもつながり、ムザファラバードでは住民がJICAの協力に感謝する会を開いてくれました。パキスタンの地震復興の道のりはまだまだ険しいですが、これからも地域の人々の心に伝わる支援を続けていきたいと思います。